

イチゴ新品種「かなこまち」栽培マニュアルの作成

生産技術部

当所で育成したイチゴ品種の「かなこまち」は、2024年11月に品種登録されたビニルハウスや温室で栽培する促成栽培用の品種です（図1）。糖度が高く、酸味とのバランスが良く、ジューシーな味わいが特徴で、現在、1月から5月にかけて県内のJA直売施設やいちご狩り園等で販売されています。

当所では、「かなこまち」の生産拡大に向けて、2024年3月に『「かなこまち」栽培技術Q&A』（以下「Q&A」という。）を作成しましたが、生産者等の要望を踏まえたその後の試験研究成果を追加して、Q&Aをアップデートした『「かなこまち」栽培マニュアル』（以下「栽培マニュアル」という。）を2026年3月に作成しました（図2）。



図1 「かなこまち」の果実

栽培マニュアルは3部構成となっており、内容は次のとおりです。

I 育成経過と品種特性

育種目標、育成経過、代表的な品種である「紅ほっぺ」や「とちおとめ」などと比較した生育、収量及び果実の特性

II 栽培管理のポイント

育苗期の親株のランナー数や葉色、土耕栽培や高設栽培における本ほ管理の目安など栽培管理上のポイント、主な障害果の発生要因と対策など

III 収穫調整・販売流通

果実の着色や硬さなどの試験結果を基に出荷・販売に適した収穫時期、アンケート調査結果による販売特性など

生産者の皆様には栽培マニュアルを配布していますが、当所のホームページにも掲載していますので、いつでも閲覧したり、ダウンロードもできます（図3）。

今後は、一人でも多くの県民の皆様に「かなこまち」が届けられるよう栽培マニュアルを活用した技術的な支援や、安定生産技術を確立するための試験研究にも引き続き取り組み、栽培マニュアルを補完するデータを蓄積し、アップデートしてまいります。



図2 「かなこまち」栽培マニュアルの表紙



図3 栽培マニュアルダウンロード用
二次元コード



「湘南ポモロンショコラ」の販売のポイントをまとめたリーフレットの作成

企画経営部

当所で育成したトマト品種「湘南ポモロンショコラ」は、特徴的な茶色の果実色であるため、生産者からどのように販売すればよいか分からないという声がありました。そこで、当部では実需者や消費者を対象に販売に関する調査を行い、その結果を取りまとめたリーフレットを2026年3月に作成しました（図4）。

リーフレットは、「湘南ポモロンショコラ」の外観（色、形）、食味に対する感想、販売先や価格、荷姿などを決める際のヒント（図5）のほか、POPの作成例も掲載しています。

当所のホームページにも掲載しており、いつでも閲覧やダウンロードできますので、是非ご活用ください。



図5 荷姿（袋詰め）の例（左：単色、右：ミックス）



図4 リーフレットの表紙

三浦半島地域に適した夏まき緑肥栽培の実証

三浦半島地区事務所

三浦半島地域では、土づくり技術の一つとして緑肥作物が栽培されていますが、近年、生産者から盛夏期でも栽培可能な緑肥が求められるようになりました。そこで、当事務所では普及指導員の調査研究活動として、生産者のニーズに応えられる緑肥作物（品種）を検索し、生産者のほ場で栽培試験を行った結果、イネ科の1年生草本であるパールミレット（品種名：ネマレット）がニーズに応えられる緑肥作物であることを実証しました。

パールミレットは、6月下旬のは種から約40日後に地上部生重が約4.8t/10aと土づくりに十分な有機物源となり、植物体が軟らかく、すき込み後の分解も容易で雑草抑制効果も期待できます（表1、図6）。これらを基に、栽培導入資料を作成し、JAを通じて生産者へ配布したところ、2025年以降、栽培面積が徐々に拡大しています。

表1 坪刈り調査結果（2024年）				
調査区	坪刈り生重 （g）	乾物率 （％）	地上部 （10a 当たり換算）	
			生重	乾物重
			（kg）	（kg）
A	244.66	9.73	3,915	381
B	360.45	9.81	5,767	566
平均	302.56	9.77	4,841	473

注：坪刈りは25cm×25cmで行い、乾物率は60℃で4日間乾燥させてから算出



図6 ロータリー耕による裁断作業

肥効調節型肥料を使った温州ミカンの施肥回数の削減

足柄地区事務所

傾斜地の多いミカン園での施肥（肥料の施用）は、生産者にとって負担の大きい作業ですが、普通温州ミカン栽培では、年4回に分けて施肥することが慣行となっています。当事務所では、JA全農神奈川県本部からの受託試験により、新たな肥効調節型肥料（肥料成分の溶出を調節した肥料）を使って施肥回数を年2回に削減できることを明らかにしました。受託試験は、普通温州ミカン「大津四号」を用いて、施肥回数削減区は3月に肥効調節型肥料を、11月に「特選みかん配合655」を施肥しました。慣行区は「特選みかん配合655」を3月から11月までに計4回施肥し、果実品質、収量等を比較しました。その結果、施肥回数削減区の果実の糖度、クエン酸濃度及び収量は慣行区と同程度であり（表2）、作業時間は半分程度に減少しました。

供試した肥効調節型肥料は、2026年度からJAグループを通じて「てまラク柑王」として県内で販売されています（図7）。

表2 果実品質、収量調査結果

調査年	試験区	糖度 (° Brix)	クエン酸濃 度 (%)	収量 (kg/m ³)
2023年	施肥回数削減区	11.2	0.87	3.6
	慣行区	11.5	0.92	3.7
2024年	施肥回数削減区	10.8	0.65	2.6
	慣行区	10.7	0.73	2.2
平均	施肥回数削減区	11.0	0.76	3.1
	慣行区	11.1	0.83	3.0



図7 てまラク柑王

トマト灰色かび病菌の薬剤感受性検定

病虫害防除部

灰色かび病は野菜や果樹、花きなどに発生する病気です。特に施設栽培のトマトやキュウリ、イチゴでは、主に11月から4月にかけて発生し、酷くなると収穫量の減少などが問題となります（図8）。灰色かび病を防ぐためには、主に化学農薬を使いますが、灰色かび病の病原菌は、ライフサイクルが短く、多くの胞子を作るため、農薬に対して耐性を獲得しやすいことが知られています。

当部では、防除指導の参考とするため、県内各地の施設トマト栽培における発生状況を調査し、病原菌に対する農薬の効果を確認するための薬剤感受性検定試験を行っています（図9）。これまでの結果では、一部の農薬が効きにくくなった耐性菌の発生が確認されていますので、耐性菌が増えないよう同じ農薬を続けて使うのではなく、作用の仕組みが異なる農薬をローテーションして使うようにしてください。



図8 灰色かび病が発生したトマトの果実

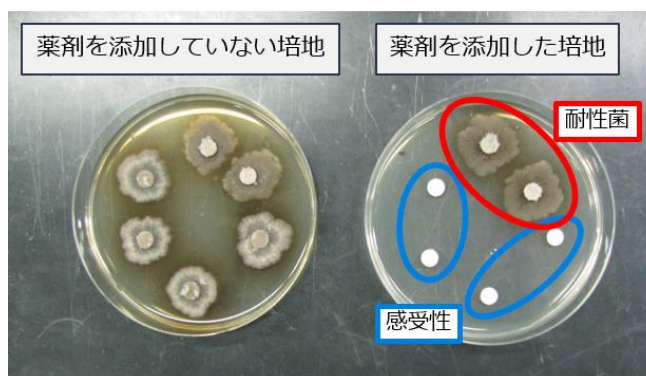


図9 薬剤感受性検定試験の様子

水稲奨励品種「にじのきらめき」の栽培特性

生産技術部

県内の水稲は、早生品種である「はるみ」や「キヌヒカリ」、中生品種である「てんこもり」が主に栽培されていますが、近年、夏の猛暑により品質や収量の低下が問題となり、生産現場から暑さに強い品種が求められています。

このため、当部では国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構が育成した水稲早生品種「にじのきらめき」に注目し、2021年から2024年まで栽培試験を行った結果、有望な品種であることが分かり、2025年10月に県の奨励品種に選定されました。

「にじのきらめき」は、「はるみ」と比較して、出穂期は1日、成熟期は2日程度遅く、稈長（かんちょう、地際から穂首までの長さ）は短く、倒伏しにくい特性があります。また、1㎡あたりの穂数が多く、玄米千粒重（玄米1000粒の重さ）が重いため、1aあたりの玄米重（収量）は多くなります（表3、図10）。さらに、高温条件で発生しやすい白未熟粒（白く濁った粒）の歩合が低く、食味に影響するタンパク質含有率もやや低く、食味調査では良食味米の「はるみ」と同等という結果でした（表4、5）。

以上のように、高温条件下でも品質、収量ともに安定している「にじのきらめき」は、県内でも高い栽培適性を有していることから、今後、JAなどと連携しながら生産拡大を図ってまいります。

表3 品種別の生育・収量調査結果(6月上旬植、2021～2024年の平均値)

品種名	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	稈長 (cm)	穂数 (本/㎡)	玄米千粒重 (g)	玄米重 (kg/a)
にじのきらめき	8.9	9.18	75.6	361	23.5	52.9
はるみ	8.8	9.16	83.1	342	22.0	50.5

表4 品種別の品質調査結果(6月上旬植、2021～2024年の平均値)

品種名	白未熟粒歩合 (%)	タンパク質含有率 (%)
にじのきらめき	4.5	6.3
はるみ	9.3	6.9

表5 食味調査結果(6月上旬植、2021～2023年の平均値)

総合	外観	香り	味	粘り	硬さ
0.3	0	0.1	0.2	0.3	0

注:食味評価は「はるみ」を0とし、-3(かなり不良、弱い、柔らかい)から+3(かなり良い、強い、硬い)の7段階で評価



図10 左:はるみ 右:にじのきらめき

